

18世紀、語られるもの、語れられないもの

阿尾, 安泰
九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻国際言語文化講座

<https://doi.org/10.15017/26206>

出版情報：比較社会文化. 19, pp.1-9, 2013-03-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

論文

18世紀、語られるもの、語れられないもの

Les recherches des langages au siècle des Lumières

2012年10月30日受付, 2012年12月18日受理

阿尾安泰*

Yasuyoshi AO

キーワード: ルソー、18世紀、化学、タブロー、デイドロ、ヴォルテール

1. 18世紀からの問いかけ

2012年は18世紀の思想家、ジャン=ジャック・ルソー生誕300年ということで、世界各地で様々なシンポジウムが開催されている。日本でも東京で9月に開催された。そうしたシンポジウムにおいては、この作家の新たな面が次々と明かされていく。音楽などの業績はもとより、植物学そして最近では化学における活動に特に関心が集まっている。最新の全集においては、化学などの科学的著作のために特別に一卷が与えられているほどである⁽¹⁾。

ただこうした多方面にわたる活躍が明らかになるにつけ、その評価に対し、ある種のニュアンスが付与されることも否定できない。はばひろい活動が可能であるのも、18世紀がいわばアマチュアの世紀であるからで、専門化が推し進められるような19世紀以後ではそうしたことは考えにくいという前提が、背景にあるように思える。各領域が厳密な体系を構成するようになっては、多面的な活動は難しく、そうした段階に達する前の過渡期であるからこそ可能だというわけである。このような18世紀アマチュア観は実はルソー研究者の中にも存在している。たとえば、ルソーの晩年の植物学に関する著述につけた注において、ルソーが植物学にたいして十分な知識を持たず、記述においてアマチュア的なところがあるという指摘がみられる。そうした傾向に対し、ルソーの植物学的テキスト群に綿密な分析を試みている小林は批判を加えている。そこに無自覚に現代の見方を投影してしまう動きが存在するからである。

リンネでさえアマチュアレベルという評価は免れ得ないのである。このように関連テキストの現代的価値のみを重視することは、一八世紀という時代背景を考えると到底許容することのできない分析方法である⁽²⁾。

現代の視点を分析に適用することに意識的になるとき、研究はどのような方向を目指して進んでいくべきだろうか。たとえば、統一的な作品理解ということも考えられよう。それはルソー解釈の王道のひとつであった。多方向に及ぶルソーの活動を目の前にして、その展開を規定する統一的な原理を探ろうとするものである。多様さの中には、決して無秩序な流れがあるわけではなく、そうした活動をまとめる規則を明らかにしようとする探求が目指された。いわゆる「ルソー問題」に解答を与えるわけである⁽³⁾。ただここではそうした方向とは別のものを目指したいと思う。これまでの研究成果を踏まえた上で、新たな可能性をめざしたいのである。統一性にこだわる時、解釈において、18世紀から現代にまで至る過程のようなものを想定し、その流れにそった整合性を求めようとして、現代のほうに18世紀を引き寄せ過ぎてしまう恐れがないとは言えないからである。時間軸の連続性を前提とする分析とは、しばし距離を置く必要があるのではないだろうか⁽⁴⁾。近代から現代にいたるプロセスを想定し、その途上の一点として18世紀をとらえるという図式とは別のところから問題を考えてみたい。

18世紀という、ある条件の下に規定された言語文化空間を、その諸条件の総体とともに分析することが今求められている。その場の詳細な分析にあたっては、十分

(・・・)現代の知識を基準とすれば、「植物学の父」

*国際言語文化講座

な情報が必要となるであろうが、分析の成否を決めるのは、量の問題だけではない。情報量を多くすれば、それだけで言語文化空間の状態がより一層明らかになるわけではない。データ量増大だけが志向されるのではなく、むしろ、そうしたデータを産出する仕組みそのものを説明するような構造的なアプローチが求められているのである。すべてが語りうるものとして、表に現れていて、それをデータとして収集、処理すればすむというわけではない。決められた条件において、ある種のもの選ばれて言語化され、可視化される一方で、言語化されず、可視化されないものが存在する。その物言わぬ厚みの上に、言語化、可視化されたものが存在している。この複雑な構成を抜きにしては、空間の多相性、生産性を語ることはできない⁽⁵⁾。語られぬものの構造を考える作業は簡単なものとはいえない。というのも難解なゆえに、人々の意識から遠ざかるのではなく、逆にその対象があまりに自然に思えたり、主体にとって身近なものと感じられるが故に、その存在が意識化されないものを考慮しなければならないからである。たとえば、現代において、9.11事件は人々の意識に少なからぬ影響を残したが、時間の経過とともに、言及される度合いは減ってきている。しかし、それは事件の影響力がなくなったというわけではない。直接的な影響力は減じたかもしれないが、潜在的な形で影響力は増したともいえる。そのような対象の存在を18世紀にも想定しなければならない。たとえば、ダミヤン事件などがそれに当たるであろう⁽⁶⁾。

こうした中で問われてくるのは、18世紀という時代の中での関係性である。いわば、横にひろがっていくネットワークの網の目を読み取る作業が求められる。ルソーという一人の人物を考えて、それだけを分析するというよりも、同時代の思想家と関連づけ、共通性と差異が作り出す複雑な関係の分析を通じて、言語文化空間の状況を明らかにするのである。例えば相互に影響を及ぼしたルソーとデイドロという2人の思想家を前にして、ルソーをデイドロ化して解釈していく、あるいはデイドロをルソー化して解釈していくと言ってもいいかもしれない⁽⁷⁾。ルソー、デイドロといった要素を選択し、その両者を関連づける18世紀という時代の関数を導き出す作業がそこに存在する。以下に展開する作業もそうした空間分析のささやかな試みのひとつである。

2. 問題の共有から—化学をめぐる

最近のルソー研究において注目を集めているテキストとして、化学に関する著作がある。ルソーがこの分野

を重視し、著述を残していることに関心が向けられている。化学についてはデイドロも注意を払っていたことを考えれば、研究に新たな可能性が生まれることも期待できるかもしれない⁽⁸⁾。

ただここで注意しなければならないのは、18世紀の化学は現在のような姿ではないということである。当時化学がどのような状態であったのか、それがいかなる点でルソーを引きつけていったのかを考えながら、問題を整理していきたい。18世紀初頭の段階では、化学はまだ中世的な錬金術の世界からそれほどかけ離れたものではなく、華々しい成果を上げ始めていた自然学などと比べると、学問的にも体系化されていない劣位にある学問であった。そうした点をフォントネルなども批判した⁽⁹⁾。逆に言えば、そうした化学に対する否定的なイメージに抗して、新たな形に作り替えていくことから18世紀の化学の歩みが始まっていくことになる。特に、ギヨーム＝フランソワ・ルエルの果たした役割は大きい。そして、この新しく生まれ変わろうとする学問の前に、他の領域ではうまく処理できない問題が提出されてくることになる。発酵と生命の問題である。ただそうした点に触れる前に、ルソーが化学といかに出会ったのか、それを見ていくことにしたい。化学とルソーとの初めての出会いは、『告白』に描かれている。1737年6月27日のことである。

(・・・) シャンベリーでは、ドミニコ会士で、自然学の教授をしている、名はわすれたが、人のいい修道士をよくたずねた。この人はたびたび小さい実験をやって、私をひどくよろこばせてくれた。一度彼にならい、あぶりだしインクをつくらうとした。そのために、ガラスびんに、生石灰と硫黄と水をなかば以上みたしてから、しっかりと口に栓をした。とたちまち沸騰が猛烈にはじまった。私は栓をぬくためにガラスびんにかけてしまった。がもうおそかった。びんは爆弾のように顔にとび散った⁽¹⁰⁾。

これがルソーとの化学の最初の出会いであった。このとき、ルソーが参照した文献は、ジャック・オザナムの『数学レクリエーション』であると言われている。逆に言えば、そのような本の普及により、この時代において科学が人々の間に浸透していく様子を想像することができる。まだこの段階におけるルソーの化学にたいする態度は、あまりにも思い入れが強く、学問的な厳密さを考慮したものではなかった。それこそ、錬金術的なビジョンからそれほど離れたものではなかったともいえる⁽¹¹⁾。

彼の態度が変化していくのは、パリに出て、フランクイユ氏のもとで、あらためて化学の勉強をしてからのことである。

フランクイユ氏は私に友情をもってくれ、行動をともにするようになった。二人は一緒に、ルエルのもとで化学をならいはじめた⁽¹²⁾。

そして、この学習の中からあの『化学教程』が生まれてくる⁽¹³⁾。

ルソーが聴講した王立植物園で行われたルエルの講義には多くの著名な人物たちが参加していた。ラヴォアジエなどの専門家をはじめとして、デイドロなども熱心な聴講者であった。それでは、なぜそれほど化学が普及していったのか考えてみたい。確かにルエルの個人的な魅力もあったかもしれないが、それだけでは十分に説明できない部分が存在している⁽¹⁴⁾。

すでにこの時期においては、化学はフォントネルが指摘したような学問的な脆弱性を乗り越えてきており、錬金術的な怪しげなイメージも克服されつつあった。そして、この学問は他の領域が満足いく説明を与えられないところに突破口を見いだしていくことになる。確かに、自然学は、デカルト、ニュートンなどの巨人の活躍により、大きな飛躍を遂げていた。しかし、その枠組みにより、すべてが説得力のある形で整理、体系化されるわけではなかった。自然学的世界観においては、主として粒子としての運動記述が基準となる。しかし、単一の粒子ではなく、複数の混合物からなる物質の場合はどうなるのか。化合物の問題が発生してくる。また様々な物質の混合とそこから生まれてくる反応、変化を考えていく中で、発酵という主題も登場してくる。熱とともに新たな物質が発生してくるわけである。そしてそうした変化のプロセスの果てに、発生の問題、生命誕生という大きなテーマも見えてくるわけである。こうして化学に課されてくる大きな課題群の姿が少しずつ明らかとなっていく⁽¹⁵⁾。

化学にたいして向けられる課題が明らかになるにつれ、逆にそうした問題に解答を与えようとして、化学に関心を持つ人々の思想の方向もわかってくる。生命の問題が考えられるとき、そこに唯物論的な方向から答えようとする人々も現れてくるわけである。その中にたとえば、ドルバックがいる。彼は化学的なビジョンの中に彼の唯物論を支える根拠を見いだそうとする。

自然を偏見なしに観察していたならば、物質はそれ自体の力で働き、運動するために外部の衝撃

をなんら必要としない、とずっと以前に納得したのであろうし、混成物は相互に作用できる状態に置かれるたびに、たちまちそこに運動が生まれ、それらの混成物がいかに驚異的な効果を生み出す力をもって作用するかに、気づいたであろう。鉄屑と硫黄と水を一緒に混ぜ、相互に作用できるようにすると、それらは徐々に熱を帯び、ついには燃焼を起こす⁽¹⁶⁾。

このように、化学反応の中に物質生成の大きな力を見ようとしている。逆に言えば、そのメカニズムを万物生成の根本原理としてとらえようとしている。そこから、神を必要としない唯物論的な世界観まではわずかな距離しかないとも言える。ただその行程を確認した上で、同じく化学に関心を抱いたルソーを唯物論者の中に組み入れることは可能なのだろうか。そうした問題を検討する前に、ルソーがその著作『化学教程』においていかなる見通しをもって、この領域に足を踏み入れたかのかをまず見てみたい。

3. ルソーの目指したもの

『化学教程』を執筆時のルソーにおいては、かつてのような化学にたいする漠然とした幻想的な思いはもはや存在しない。この新しい学問を真理へ至る導きとして、考えようとする姿勢が初めの部分においてすでに明確に現れている。従来の諸学問の不十分なところを乗り越えるものとして、化学は期待されている。

(・・・) 化学が人々の財産である技術をとませるようなすばらしい多くの発見を有しているにもかかわらず、啓蒙されたはずの人々でさえ、今日でも化学を無用で空想的な研究であるとみなしている(・・・)しかし、物質とよばれるあらゆるものから獲得できる最も確実な知識へとわたしたちが到達できるとみこめるのは、化学によってだけであると思われる⁽¹⁷⁾。

確実な知識こそルソーの求めるものなのである。それは取りもなおさず、化学以外の学問が期待された成果をあげていないことであり、そうしたことに対する批判となる。たとえば、これまである程度の成果をあげてきた自然学といえども、その追求から逃れられるわけではない。

(・・・) 自然学は物体をその運動、形象、その

他の類似した変化によってのみ考察する限りにおいて、諸物体が相互に産出しあう諸効果のいくつかについて判断することをわたしたちに教えてくれる。しかし、自然学はいわば見かけと表面しか検討しないので、物質を内的にかつその固有の基体によって認識することは少しもできないのである⁽¹⁸⁾。

物体内部への探求こそが化学にゆだねられることになる。物体を一つの塊として考えるならば、力学的な世界観が適用できるであろうが、物体を様々な要素の混合体と見なすとき、新たなアプローチが必要となる。物体を混ぜ合わせて、新たな化合物が生まれるとき、それをいかに記述すればいいのか。そこには均質な物体同志の衝突とそこから生まれる運動を考えるのとは、別の視点が必要となる。そうした問題の延長上に燃焼の問題があるだろうし、すでに述べたように発酵の問題が存在している。そして、言うまでもなく、至高の大問題たる生命という難問が最終的に控えている。すでに指摘したように、そこから唯物論への道も遠くないことは確かである。ただここでルソーを唯物論者たちの中に組み入れるかどうかという問題には立ち入らないことにしたい。それはその問いかけから逃げるということではない。性急に結論なるものを出そうとし、問題を簡単に終わらせて、新たな探求の可能性を閉ざすことを恐れるからである。今は化学の求める明確さを自然学との差異だけでなく、もう少し別の観点から考えてみたい。

ラヴォアジエという優秀な化学者がいる。革命のさ中においてギロチンで消えることになる人物である。彼はルエルらの化学への貢献を認めながら、さらに新たな方向にこの学問を、特に1780年代以降に開いていこうとする。彼はこの学問領域における言葉、術語の無秩序さを問題にする。そこでは中世以来の乱雑さが払拭しきれないなのである。物質同志が結合によって、新たな物質が誕生するとき、そのメカニズムを明らかに説明できるような名称がそれぞれの物質に与えられるべきではないだろうか。化合物の合成と分解の過程が明解になるような名称が考案されるべきではないだろうか。名称において履歴が明確に語られるならば、その生成過程を思い浮かべることはそれほど難しくはないはずである。そこに、18世紀の認識の構造に特徴的な、語ることと見ることの通底性が見て取れる。そうした点において、ラヴォアジエは、コンディヤックの方法に、特に『論理学』に依拠しながら、事態に対処しようとする。コンディヤックがその著作を通じて、絶えず明解な言語表現システムの構築を目指したことはよく知られている。とりわ

け「分析 (analyse)」という概念は重要であり、この概念を通じて、諸事象を単純な要素に分解しながら、そのメカニズムを明らかにするとともに、分解した要素を再構成することで、プロセスの再現も可能となることを示そうとしたのである。ここにおいて化学のシステムの問題は言語の問題と同等となってくる⁽¹⁹⁾。複雑な言語の構成を部分に還元することで単純なモデルを作りかえ、それに基づいて言語を再構成していく作業と化学の探求が重なってくるのである。このように言語モデルという観点から化学を考えていくとき、ルソーが化学に関心をもったのも決して偶然とは思えない。というのも、ルソーこそ、言語という問題を提起して、様々な観点からアプローチを続けてきたからである。たとえば、『言語起源論』はそうした試みをよく表している。

4. 化学からの折れ曲がり

このように化学という領域で「言語」というキーワードに遭遇し、言語モデルの明晰化から化学へと進んでいくという方向を考えるとき、そのベクトルを他の領域に反転して分析をすすめることはできないだろうか。ルソーという人は、基本的に全方向性の人である。一つの方向に進んだベクトルは決してそれだけで完結することではなく、別の領域に向きを変えて出現する可能性を持っている。それゆえ、あれほど多方面にわたる活動が可能となったのである。化学における細かな要素の連結、運動、作用を規定できるようなモデルの模索は他の領域では、いかなる形をとるのだろうか。他の分野に折り返して、新たな分析の可能性を考えてみよう。

たとえば、言説表現の場において考えてみよう。そこにおいて18世紀におけるタブロー (tableau)「情景、場面」という概念の問題が現れてくる。それはイメージ (image)「像」とは異なる。17世紀が想像力 (imagination) を大きな問題として論議したのに対し、18世紀が類似した問題を感情 (sentiment) あるいは感受性 (sensibilité) という言葉によって新たな見通しを開こうとしたことを想起しよう。ある固定された瞬間ではなく、動きを伴った場面の集積としての情景が表現の地平において重要なものとなってくる。その利用は決して、文学的な著作だけに限られるわけではない。たとえば、演劇論争の書とされる『ダランベール氏への手紙』の中に挿入されたサン＝ジェルヴェの広場での情景描写をどのように考えればいいのかだろうか。反演劇的な論調で語り始めてきた言説の中に現れるきわめて演劇的な場面をどのように位置づければいいのかだろうか。

(・・・)全員が手をつなぎ、大きな輪ができている。そしてその輪が拍子に合わせて、一糸乱れず蛇のように曲がりくねって、くるくる回転するかと思うと今度は逆方向に回り始める。(・・・)これらすべてがきわめて激しい感動を生み出し、人々はもはや冷静に振る舞うことはできなかった⁽²⁰⁾。

こうした文章の挿入の意味を考えるためには、ルソーの議論が単なる反演劇の立場ではなく、演劇の用い方を巡るきわめてプラグマティックなものであることを想起する必要があるだろう。ルソーは演劇自体を批判するというよりも、悪しき方向にむかってしまう演劇のあり方を糾弾しようとしたのである。そして、ここで重視したいのは、そうした論述の効果を上げるタブローの重要性である。それは付随的な存在ではない。論理の円滑な展開を助けるだけではなく、論理そのものを牽引し、人々を説得という方向に導いていく重要な役割を果たすのである。実際ルソーの著作において、論理的展開の中で、そうした説得力をもった情景が出現する例は決して少なくないように思われる。『ダランベール氏への手紙』の例だけでなく、言語の起源の場における共同体の姿、エミールにおいて登場するサヴォアの助任司祭の語りの場面などが、すぐ浮かぶであろう⁽²¹⁾。そうした情景の印象のつよさは、それを構成する言語モデルの正当性の表れでもある。もし、そのモデルが悪しき構造を持っているのであれば、そこから生み出される情景は理解可能なものとはならないし、それを目にするものの心を打つこともないであろう。感動的な情景を出現させることができるのも、そこにはたらく言語が円滑に機能しているからである。

ただし、ここである問題が出現する。確かに、タブローの価値を認めるにしても、なぜ論理という流れの中に、そのような異質とも言える要素を導入する必要があるのだろうか。そのような異なるものを挿入しなくとも、論理のみによる均質的な言説空間の方が伝達の密度も高いのではないだろうか。ここにおいて、このタブローという語が持つもうひとつの次元の重要性が表れてくる。それは演劇という問題である。この語は演劇における場面を想定させる。観客が参入する場の出現は、演じる者と見る者を結びつける契機となる。論理を介して理解、了解していくという間接的なレヴェルではなく、感情の発露からくる直接的な交流の場が生み出される可能性が高いのである。この場において、表現者とそのメッセージを受け取るべきものが出会い、交感の瞬間が実現する。その直接性、自然性ゆえにこのタブロー・モデルが多用されるのではないだろうか。伝達とその大

きな効果を期待できる空間が志向されるわけである。ルソーだけがこうした出会いを目指すわけではない。18世紀において、無実の人カラスを救出するために、ヨーロッパ的な規模でキャンペーンを展開したヴォルテールもこうした機能を知らないわけではなかった。水林は、この無実の民の救出といういわば政治的な事件をヴォルテールが、あたかも一個の演劇作品であるかのように見なしていると指摘し、この言語戦略を支える演劇性の重要性を指摘している。水林は、ヴォルテールの手紙に書かれた、「わが哀れな犠牲者たちの一件を最後までやり通すことができさえすれば、『カサンドル』さえ放棄してもよいと思っています。これ以上興味深い一件はありません。神の名において。カラスの悲劇を成功させてください」という言葉に注目する。そしてヴォルテール自身の書いた劇『カサンドル』と現実のカラス事件が同一平面上に置かれることで、両者の等価性は明らかとなるのである。ある主題に基づいて議論が生まれ、そこから公共圏が形成されていくプロセスの中で演劇モデルがその重要性を示す⁽²²⁾。

こうしてタブロー概念は公共圏への開きという道を切り開いていく。タブローという概念によってそうした場を開くことで多くの読者を呼び込み、また説得力を増すことが期待できるわけである。そうした見地に立つとき、はじめて18世紀の医学書に見られる不思議な構成が理解されてくるのではないだろうか。医学書における特異性とは医学的な言説の中に、突然物語的な描写が入りこんでくることである。18世紀においては、物語的な描写は次第に演劇に接近していき、この両者の関係が非常に緊密になった時期である。そうしたことを考慮すれば、この物語的な描写とはタブローであり、演劇的な場面に近いのではないだろうか、実際、タブローという語を用いて叙述をはじめているものもある。

私が紹介する症例は、劈頭から地獄絵図となることだろう。私自身、その不幸な患者を初めて診た時はすくみあがってしまったほどである。そして、若者たちが自ら進んで飛び込んでいく深淵がいかにおそろしいか、あますところなく示してやらなければとの感がいや増したのは、他ならぬその時であった⁽²³⁾。

この「絵図」と訳した部分が原文では《tableau》という語が使われているのである。そして、作者は以後展開されていく恐ろしい描写を通じて、読者に、より説得力のある形で問題となっている病気の恐ろしさを伝えることができると信じている。あたかも恐ろしい舞台をみて、そ

の恐怖を観客全体で共有することで、より大きな効果が得られるという見通しがそこにはある。

5. 語るものとは

ルソーが化学に接近したとき、彼の関心はその科学的関心にあっただけでなく、その学問が可能にするある種の明晰性にルソーが惹かれていたからのように思える。個体中心の自然学が見逃してきたものを、化学が新たに取り組みようとしているのをルソーは感じていた。個体は実は均質のものではなく、そうした見方は粗雑なものであり、複雑な構成を考えて、混合物の関係を記述、解明しようとする化学に新しい動きを見いだしたのも当然のことであった。

そうした明晰性の探求は、事物を要素に還元しながら、その動きとそれを統御する秩序を見いだそうとする点で、18世紀の認識の枠組みを大きく規定したコンディヤックの方法論とつながるものでもあった。実際化学の改革を推し進めようとしたラヴォアジエは自分の方法とコンディヤックの方法のつながりについて言及している。またそれは、フーコーがその著書、『臨床医学の誕生』でも強調するように、18世紀医学の枠組みを大きく規定したのもでもあった。ルソーもそうした流れと無縁ではなかった。彼は諸要素を突き動かす運動を記述しようとした。目にすることを明確に語ることを目指し、また明確に語れることで、しっかりと見ていることが明らかとなるわけである⁽²⁴⁾。

ただルソーはそうした明確さがある種の力によって支えられるべきであるとも感じていた。明確さが他の人々と共有できないのであれば、その価値も減じることになると考えていた。つまり、人々の交流する公共圏での承認が得られなければ、価値はないのである。提出される言説にたいして、人々はいわば演劇における観客のように、その一挙手一投足に目を注ぎ、評価を下し、それがすばらしい成果をもたらすものであれば、賞賛を送ろうとする。こうした演劇的なモデルを支えにした言語文化空間の姿をルソーは意識していたし、それはほかの著作家たちも同様であった。このように言語の微分化による明晰性の追求とそうした細分化をまとめあげる演劇的な力動的な働きかけが18世紀の言語文化空間を特徴付ける機能であったように思われる。

注

(1) 東京での国際シンポジウムは『ルソー生誕300周年記念国際シンポジウム ルソーと近代 / ルソーの

回帰、ルソーへの回帰』と題され、海外からの研究者と日本の研究者を招いて、2012年9月14日から9月16日にかけて開催された。そして、2012年に出版されたストラトキン社版全集では、第11巻が科学的な著作にあてられている。

- (2) 小林拓也、「『植物学者』ルソー」、『思想』、岩波書店、2009年、第11号、215ページ。ルソーのテキストに付けられた注については、以下参照。
Jean-Jacques Rousseau, *Oeuvres complètes*, t. IV, Gallimard, 1969, p.1844.
- (3) 確かにそうした中から数々の優れた研究が生まれたことも事実である。たとえば、主なものとして、以下のようなものがあげられよう。
Ernest Cassirer, « Das Problem Jean-Jacques Rousseau », *Archiv für Geschichte der Philosophie*, vol.41, pp.77-213, pp.479-513, 1933.
Robert Derathé, *Le rationalisme de Rousseau*, Presses Universitaires de France, 1948.
Jean Starobinski, *La Transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1957.
Michel Launay, *Jean-Jacques Rousseau, écrivain politique*, C.E.L./ A.C.E.R., 1971.
- (4) そうした点は先に言及した東京での国際シンポジウムの以下の発表の後半部でも強調されていた。
川合清隆、「マブリ師との比較による、ルソー革命、共和国」
- (5) こうしたアプローチを医学の問題に適用した優れた研究としては以下参照。
Michel Foucault, *Naissance de la clinique - Une archéologie du regard médical*, P.U.F, 1963.
- (6) ダミヤン事件については、以下参照。
Pierre Rétat (dir.), *L'Attentat de Damiens*, Presses Universitaires de Lyon, 1979.
Dale K. Van Kley, *The Damiens Affair*, Princeton University Press, 1984.
またダミヤン事件と時代との関係については、以下の拙論およびペラン論文参照。
阿尾安泰、「ルソーをめぐる読解のトポロジー(1)」、『ステラ』、九州大学フランス語フランス文学研究会、第21号、2002年、pp.87-97。
阿尾安泰、「アルマン少年の出来事 - ダミヤン事件

の示す18世紀における王と人民との関係」、『言語文化論究』、九州大学大学院言語文化研究院、第15号、2002年、pp.61-68.

Jean-François Perrin, « SACER ESTOD : Une approche des enjeux politiques et théoriques dans *Rousseau juge de Jean-Jacques* », *Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau*, t.46, Droz, 2005, pp.79-113.

- (7) すでに、ディディエ・マソーは18世紀における保守派と進歩派がそれほど明確に分かれるわけではなく、その両者の関係の複雑さについて以下の著作で明確に分析していた。

Didier Masseau, *Les ennemies des philosophes*, Albin Michel, 2000.

そうした試みを踏まえて、より一層18世紀の言語文化空間の複雑さを明らかに使用とする研究が現れていった。特に以下参照。

Franck Salaün (éd.), *Diderot Rousseau - Un entretien à distance*, Éditions Desjonquères, 2006.

Michel O'Dea, *Rousseau et les philosophes*, SVEC, 2010:12, Voltaire Fondation, 2010.

- (8) こうした分野での新たな研究としては以下参照。

Bruno Bernardi, *La fabrique des concepts*, Champion, 2006.

Bruno Bernardi, “Pourquoi la chimie ? Le cas de Rousseau”, *Dix-huitième siècle*, No. 42, 2010, pp.37-47.

淵田 仁、「なぜルソーは分析を批判したのか？ — ルソーの『化学教程』についての試論—」、『フランス哲学・思想研究』16号、2011年、106-114ページ。

淵田 仁、「『化学』を巡るフィロゾーフたちの戦い— ルソーを中心にして—」、『『百科全書』・啓蒙研究』、1号、2012年、169-186ページ。

またディドロと化学の関係については以下参照。

Francois Pepin, *La philosophie expérimentale de Diderot et la chimie - Philosophie, sciences et arts*, Garnier, 2012.

大橋完太郎、『ディドロの唯物論—群れと変容の哲学』、法政大学出版局、2011年。

- (9) Fontenelleの批判については、以下参照。

Michel Delon (éd.), *Dictionnaire des Lumières, art « chimie*», PUF, 1997, pp.206-210.

またこの時代の化学における学問的状况については、

下記参照。

川村文重、「ルエルの化学—機械論的哲学と『百科全書』の化学との間—」、『『百科全書』・啓蒙研究』、1号、2012年、149-167ページ。

さらにラヴォアジエとコンディヤックの関係については、以下参照。

Bernadette Bensaude Vincent, “Lavoisier lecteur de Condillac”, *Dix-huitième siècle*, No. 42, 2010, pp.473-489.

- (10) J.-J.Rousseau, *Les Confessions, Livre V, Oeuvres complètes*, Gallimard, “Bibliothèque de la Pléiade”, 1959, t. I, p. 218.

- (11) ルソーの参照した文献については、以下参照。

J.-J.Rousseau, *Les Confessions, Livre V, Oeuvres complètes*, Éditions Slatkine, t.I, 2012, pp.318-319.

また当時の科学一般の普及については、以下参照。
バーバラ・M・スタフォード、『アートフル・サイエンス』、産業図書、1997年。

- (12) J.-J.Rousseau, *Les Confessions, Livre VII, Oeuvres complètes*, Gallimard, “Bibliothèque de la Pléiade”, 1959, t. I, p. 293.

- (13) ルソーの『化学教程』には、現在主として以下の二つの版が存在する。

Institutions chimiques, texte revu par Bernardi et B.Bensaude Vincent, Corpus des oeuvres philosophiques de langue française, Fayard, 1999.

Institutions chimiques, éditions par Christophe Van Staen, Honoré Champion, 2010.

本論文においては、後者を用いることとし、引用に際しては、ICと略記し、ページ数を示すこととする。そして、現在刊行されているスラトキン版全集においても、後者のものがほぼそのまま採用されている。そして、後者の版の序論にはルソーをめぐる当時の化学の状況が明確に述べられている。

- (14) こうした状況については、前掲、川村、Bensaude Vincent 論文参照のこと。

- (15) こうした点については、前掲、川村論文および大橋の著作(特に、第4部)を参照のこと。

- (16) D'Holbach, *Système de la Nature*, Coda, 2008,

PP.20-21.

(17) *IC.*, p.58.

(18) *IC.*, p.58.

(19) この点については、注(8)の文献を参照のこと。
特に *Dictionnaire des Lumieres*, art « chimie », p.210.
Bensaude Vincent 論文, pp.479-480.

(20) Jean-Jacques Rousseau, *Oeuvres complètes*, t. V,
Gallimard, 1995, p.123.

(21) たとえば、以下の箇所参照。

Jean-Jacques Rousseau, *Oeuvres complètes*, t. IV,
Gallimard, 1969, p.558sq.

Jean-Jacques Rousseau, *Oeuvres complètes*, t. V,
Gallimard, 1995, p.395sq.

(22) この問題については、下記参照。

水林 章、『公衆の誕生 - ルソー的経験と現代』、
みすず書房、2003年、特に56ページ以降。

そして、ヴォルテールの引用については、以下参照。
Lettre à Charles-Augustin Ferriol, comte d'Argental
et à Jeanne-Grâce Bosc du Bouchet, comtesse d'Ar-
gental, le 14 juillet, 1762.

またヴォルテールにおいて論争が演劇的な図式をと
ることについては、以下参照。

Olivier Ferret, Gianluigi Goggi et Catherine Volpil-
hac-Auger (éd.), *Copier/coller: écriture et recri-
ture chez Voltaire. Actes du colloque international*.
Pisa: Pisa University Press. 2007, pp.24-25.

また演劇におけるタブロー概念の重要性につい
ては、以下参照。

Pierre Frantz, *L'esthétique du tableau dans le
théâtre du XVIIIe siècle*, Paris, PUF, 1998.

Marc Buffat (éd.), *Diderot, l'invention du drame*,
Klinscksieck, 2000.

Pierre Frantz et Sophie Marchand (dir.), *Le théâtre
français du XVIIIe siècle*, Editions L'Avant-scène,
2009.

さらに演劇的なものが影響力をまして、小説的な世
界にも入り込んでいくことの具体的な分析につい
ては、以下参照。

Catherine Ramond, *Roman et théâtre au XVIIIe
siècle*, *SVEC*, 2012:04, Voltaire Foundaion, 2012.

(23) Samuel-Auguste Tissot, *L'Onanisme*, Editions de
la diiférence, 1991, p.44.

ただ確認しておくべきことは、医学がこうしたタブ
ロー概念による大きな働きかけ、言い換えれば、読
書の及ぼす効果をただそのまま無自覚に利用してい
たわけではないということである。読書の及ぼす影
響について、医学的な見地からの分析作業が始まっ
ていくのも18世紀からのことである。こうした傾
向については、下記参照。

Alexandre Wenger, *La fibre littéraire*, Droz, 2007.

(24) ただ確認しておかねばならないことは、ルソー
が18世紀の新しい化学の動きを意識していたとし
ても、その意識はたとえば、デイドロなどの百科
全書派のものと完全に一致するわけではないこと
である。その微妙なずれについては、特に(7)であ
げた淵田論文参照のこと。

またコンディヤックの思想の18世紀における重要
性については、以下参照。

山口裕之、『コンディヤックの思想 - 哲学と科
学のはざままで』、勁草書房、2002年。

なお本研究はJSPS科研費23520389の助成を受けた
ものである。

Les recherches des langages au siècle des Lumières

Yasuyoshi AO

ABSTRACT

En 2012, le Tricentenaire de Jean-Jacques Rousseau est célébré dans de nombreuses villes dans le monde entier. Dans les études, de plus en plus nombreux sont les rousseauistes qui poursuivent des recherches de domaines peu étudiés comme les écrits chimiques. Au XVIII^e siècle, la chimie, à peine affranchie des contraintes alchimiques, allait entrer dans un processus moderne, en rejetant les mots archaïques et inintelligibles au profit de termes clairs et raisonnables. Rousseau s'intéressait à la rationalité avec laquelle cette science naissante visait à s'établir comme science exacte. Cette rationalité se fondait sur la notion d'analyse à laquelle Condillac recourait pour expliquer le mécanisme des langages réduisant un amalgame complexe à des unités simples d'éléments. La rationalité comme voie nouvelle de la chimie est assurée par l'utilisation du modèle linguistique dans le domaine scientifique.

Les recherches des fonctions langagières ont ouvert de nouveaux horizons dans les perspectives esthétiques et épistémologiques du XVIII^e siècle. Dans l'esthétique de cette époque, on soulignait la notion de tableau exerçant des influences importantes sur les arts et les théâtres. A partir de cette notion, on essayait de parler de l'espace culturel qui permettait de partager les expériences artistiques. Autrement dit, le tableau est un concept par lequel on peut établir une place publique commune pour une communication mutuelle et globale.

Ainsi au XVIII^e siècle, les considérations des langages ont donné naissance à deux voies différentes : la recherche centripète visant à l'analyse exacte de la structure des éléments, d'une part ; la recherche centrifuge visant à avoir les relations avec les autres domaines afin d'établir une communication plus globale, d'autre part.